ナチス時代のドイツのバプテスト教会（1）

青　木　紋　子（翻訳）
片　山　　寛

以下は，ドイツ福音主義自由教会同盟（バプテスト）が1984年に発行した，バプテスト発足150年記念誌『一人の主，一つの信仰，一つの浸礼 —— ドイツにおけるバプテスト教会の150年：1834-1984』[1]の中から，この本全体の編者でもあるギュンター・バルダースの著した論文「ドイツ・バプテスト小史」（S.17-167）の第５章，「第三帝国と第二次世界大戦の時代（1933-1945）」から，その前半（S.86-106）を訳出したものである。後半（S.106-125）は『神学論集』の次号に掲載したい。

この翻訳のいきさつについて短く説明したい。西南学院大学神学部４年生の青木紋子（あやこ）さんが，ナチス時代にドイツのバプテスト教会はどのように行動していたのかを主題にして，卒業論文を書きたいと強く希望した。ところが間もなく判明したことは，この主題についての日本語文献は皆無に近いということであった。そこでドイツ語文献を入手し検討する中で[2]，この本を読むのが最適であろうと判断して，読み始めたのである。

読み進むうちに反省させられたことがある。日本ではバルトやボンヘッファー，ニーメラーなど告白教会の教会闘争については，多くの人々が関心を持って調べており，ややもすると，自分も告白教会の一員であるかのような口吻で語られることが多い。しかし，たとえばバプテストのような自由教会がどのようにナチズムの時代を苦しみつつ生きのびたのかについては，これまで私

1) *Ein Herr, ein Glaube, eine Taufe －150 Jahre Baptistengemeinden in Deutschland 1834－1984, Festschrift Im Auftrag des Bundes Evangelisch-Freikirchlichen Gemeinden in Deutschland*, Oncken Verlag Wuppertal und Kassel 1984.　以下 *Ein Herr* と略記。

2) 資料探索の過程で，東京バプテスト神学校の内藤幹子先生に助力をいただいた。この場を借りて感謝を申し上げたい。

たち日本のバプテストは知ろうという努力さえして来なかったのではないか。またドイツ福音主義教会についても，その中の告白教会やその対極のドイツ的キリスト者については研究されているけれども，現実にはほとんどのキリスト教徒を含むはずの「教会的多数派」kirchliche Mehrheit については，全く研究されて来なかった。それではドイツ教会闘争がどのような性格のものであったかについて，大きな誤解が残るのではないだろうか。それでは私たちはあのナチズムの時代とその中で生きた多様な人々を，本当に理解したと言えるだろうか。何か単純な善玉・悪玉論で片付けてはいないだろうか。それは現代という，さらに複雑化した世界において生きる私たちにとって，正しいことなのだろうか。そのような反省が起こってくるのである。だとすると，このバルダースの論文を翻訳して，諸賢の閲覧に供することには，大きな意味があることになる。それは日本におけるドイツ教会闘争研究の欠落をいくらかでも埋めることにつながるのではないだろうか。

そのような考えから，私たちはただ読むだけではなく，邦訳を作って，『神学論集』に資料として掲載することにした。バルダース論文を特に選んだのは，これがドイツのバプテスト自身が戦後表現した最初の自己総括であるということが大きい。苦しみながら書いているという点において，ここには単なる歴史研究にとどまらない迫力が感じられるのである。1984年という時点ではまだ多くの証人が生きていたはずである。リヒァルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領が『荒れ野の40年』という有名な連邦議会演説をしたのが1985年であるが，これはその同じ時代のバプテストが，自分たちの40年前を回顧した文書なのである。

青木さんが立派な下訳を作ってくれたので，私はその訳文を推敲すると同時に，必要だと思われる訳註を付け加えた。そのような経過なので，翻訳についての最終責任は私にあるけれども，この仕事をすることになったそもそもの始まりは，青木紋子さんの問題提起と情熱にあったのだということを，ここで強調しておきたい。（片山）

ギュンター・バルダース 「第三帝国と第二次世界大戦の時代（1933-1945）」

第三帝国の終焉以後の40年間，「ハーケンクロイツの下で」のバプテスト教会の歴史は書かれないままであった[3]。その原因は資料不足にあるのではない。なぜなら資料は，文書館にはたくさん残っているからである —— たとい価値ある目撃証言や個人的資料はますます入手困難になって来ているとしても。理由はどこか他にある。ドイツ福音主義教会では，人々はすでに第三帝国の最中に，起こった出来事を記録し始め，そして第三帝国崩壊後間もなく分析し始めた。それは，教会闘争で確認された認識を生き生きと保持するためであった。他方，バプテストにはこの意欲が完全に欠けていた。教会闘争にわずかにでも類似するような取り組みが，バプテストには —— ほかの自由教会も同じであるが —— 存在しなかったからである[4]。もし私たちがバプテストの場所を —— 所与の単純な —— 枠組みの中に，つまり一方に告白教会，他方に「ドイツ・キリスト者」を置くような枠組みの中に位置づけようとするならば，バプ

---

3) 従来の研究は，限られた分野についてしかなされておらず，またいくつかの例外を除いては発表されてこなかった。長らく計画されて公刊が待たれるのは，Karl Zehrer の大規模な業績，*Die Freikirchen und das "Dritte Reich"*（ライプツィヒのカール・マルクス大学に提出された博士学位請求論文，719 頁，1978 年。〔訳注：この本は 1986 年に出版された〕）である。この論文はすでに不可欠の重みを持っている。というのは，Zehrer はベルリンに保管されている帝国教会管理省の資料を使用することができたからである。にもかかわらず，個々の自由教会の歴史についての個別研究には，まだ欠落が残っている。参照，Karl Heinz Voigt: *Die Methodistenkirche im Dritten Reich*, Stuttgart 1980, 42-47。Voigt がここで下している Zehrer 論文への評価に，私は基本的に賛成である。——バプテストの領域について嚆矢となったのは，Günther Kösling: *Die deutschen Baptisten 1933/1934. Ihr Denken und Handeln zu Beginn des Dritten Reiches*（マールブルク大学神学博士論文 1980 年）である。Reinhard Assmann, "Schicket euch in die Zeit!" Die Bund der Baptistengemeinden in Deutschland am Anfang des "Dritten Reiches"（神学校修了論文，Bukkow [Märkische Schweiz] 1981, Oncken Archiv Hamburg）をも参照。その他の文献については，この論文の後の方で使われた資料も含めて，私が計画中の資料集に掲載予定である。

4) 概観を得るためには，Han-Walter Krumwieder: *Geschichte des Christentums III. Neuzeit*, Stuttgart 1977, 211-241（文献表付），が推奨される。——次の両大著はスタンダードとなる著作である（これらは，これまでの諸巻では残念ながら自由教会については扱っていない）。Kurt Meier: *Der evangelische Kirchenkampf* 1/2, Göttingen 1976. -- Klaus Scholder: *Die Kirchen und das Dritte Reich* 1, Frankfurt am M. 1977.

テストはいわゆる「中間」に属するのである。すなわち，あの教会的多数派 kirchliche Mehrheit，まさに自由教会的多数派でもあるような中間である。この多数派は両方のサイドから距離を保とうと努力したのであり，そしてとりわけ最近になってようやく，歴史家の視野の中にも入ってきたのである。この場所はしかし全体主義国家においては，ただ順応し沈黙することを通してのみ，守られえた。私はそこで用いられた「かけひきや妥協」（Hans Luckey の発言）を告発・精算することが，私の課題だとは思わない。しかしながら，それらを正当化しようとも思わない。このことよりも大切なのは，いかなる視点から，第三帝国と第二次世界大戦下のバプテストの歴史を書くべきかを，明瞭にすることである。この歴史は，この時代におけるドイツ・バプテスト同盟（Bund）の歴史としてのみとらえられはしないし，ましてや〔訳註：バルメン宣言や戦後の罪責告白のような〕突出した表明の歴史としてのみとらえられはしない。この歴史は，少なくとも同じくらい突き止めるのが難しい個々の教会の歴史，そうだ，個々の教会員の歴史なのである。すなわち，いったい彼らがいかなる役割を演じたのか，ということなのだ。歴史的・神学的な評価は，有罪判決ではありえないし，そうである必要もない。そのことは，のぞむらくは強調する必要がないことでありたい。私たちあとで生まれた者たちもまた，私たちの父祖たちと同じように神の前での自分たちの振舞いについて釈明しなければならない日が来る。すなわち，すでに終わった道のりについても，さらに来るべき将来の決断状況についても釈明しなければならないであろう。これらの状況の重さを私たちは ―― 人間的に言えば ―― もしかするとあの人たちと同じように過小評価しようとするかもしれないのだ。つまりあの人たちとは，1933年にアドルフ・ヒトラーと国家社会主義に権力を取得させてしまった人々であり，続いて自分が無力化され，「全面戦争」にいたるまで全面的な服従へと促されるのを経験した，その人々である。

だとすると次のことは確かである。「キリスト教的政治家」パウル・シュミッ

ト[5]の1930年の命題[6]，すなわち「私たちは国家に対して，一定の緊張関係を保っている。それによって私たちは国家の偶像化や民族カルトに対して距離を保っている。そして微妙な距離を保ち続け，そのようにして国家の良心であり続けているのである。私たちは国家や民族に私たちの心の全体を与えることはできないのだ」という言葉は，1933年〔ヒトラーの政権掌握〕以後，厳しい試練にさらされた――その試練から人々は自分自身を可能なかぎり遠ざけておこうと試みたのだけれども。同じことは以下の立場表明に関しても言える。すなわち「神の言葉は，あらゆる時代に，教会に次のような使命を与える。つまり批判的に自らの声をあげるということ，癒しつつその手をさしのべるということ，そして何よりも，人間と世界の新しい誕生についての喜ばしい使信を我々の民族に伝道しつつ宣べ伝えるという使命を」。この包括的かつ要求の多い使命意識をもって，1933年に諸教会に向かって「現代における告白的な言葉」[7]を発表したのは，7人のハンブルクの〔バプテストの〕説教者たちであった。以下で

5) 〔訳註〕Paul Schmidt（1888-1970）は，戦前・戦後のドイツ・バプテストを代表する指導者である。生家は貧しく，働きながら苦学して 1911－1914 年と 1919 年にハンブルクのバプテスト説教者神学校 Predigerseminar で学んだ。この勉学の中断は第一次世界大戦による。1919 年に卒業し，ブレスラウとチューリヒで牧師（1919-1928）。その後，カッセルのバプテストの出版社 Oncken Verlag で，“*Jungbrunnen*”, “*Hilfsboten*”, “*Wahrheitszeuge*” などの雑誌の編集者を 1935 年までするかたわら，CSVD（キリスト教的社会的国民奉仕（党）Christlich- Soziale Volksdienst）という名の小政党で政治家活動をし，1930 年から 1932 年まではドイツの国会議員をつとめた（14 人の議員中の一人）。1933 年にヒトラーが政権を握ると，ナチス以外の党派が禁止され，この党は解散，シュミットはバプテスト同盟の専従に戻った。1935 年まで『若い泉 *Jungbrunnen*』誌の編集長をした後，1935 年から 1959 年までの長期間，同盟の本部長 Bundesdirektor をつとめた。戦後はヨーロッパ・バプテスト伝道協会の設立に尽力し，1954 年から 58 年はその事務局長 Generalsekretär を兼任していた。バプテスト同盟内では雑誌『真理の証人 *Wahrheitszeuge*』の編集長として健筆をふるった。1959 年にバプテスト同盟本部 Bundesdienst を退職してからは，ヨーロッパ福音主義教会連合 Europäische Evangelische Allianz のために奉仕し，1961 年から 67 年にはその議長 Vorsitzender をつとめた。1970 年 1 月に Bergisch-Gladbach で死去。Cf. *Ein Herr* (註 1), S. 358f.

6) Paul Schmidt: *Die Stellung der Gemeinde zum Staatsleben der Gegenwart*, Kassel 1930, S.21f.

7) このテキストは，中心的には，1929 年以来バプテスト説教者神学校の教師をした Hans Luckey 1900-1976 の起草による。詳細は以下。Günter Balders: Eine “Theologie des Führerprinzips”? Deutsche Baptisten auf der Suche nach einem Weg im Dritten Reich, in: *Theologisches Gespräch* 1-2/1979, S.29-40 (33).

示されるように，真剣に受けとめられたのは，第三の使命（「伝道しつつ宣べ伝える」）にのみ偏っていたのかもしれない。

1．大声の希望と小声の疑惑

大声の希望と小声の疑惑を伴いつつであるが，第三帝国はバプテストの印刷物の中で歓迎された。ハーケンクロイツ下では救いが直ちには見いだされないかもしれないということは，一般によく知られていた。間違った期待，明らかな警告，すなわちハーケンクロイツ（鉤十字架）という記号の下でキリスト教的な装いではあるけれども実は「神なきボルシェヴィスム（共産主義）」に遭遇しているのかもしれないという警告[8]も，欠けてはいなかったのである。1932年に政治的な党派闘争に直面して，バプテスト同盟事務局は次のように表明した。「各個教会そのものは，こうした事柄には関わらない。教会は全く非党派的であり，非政治的である」[9]。しかしナチスの運動によってひどく心揺さぶられていた若者たちには，次のように説き聞かせねばならなかったが，それはもっともなことであった。すなわち，「キリスト教青年は，今日のような革命の時代にあって，何よりも神に従うということをやめてはならない」[10]。そしてあからさまに懐疑的に，『真理の証人』誌の編集長，つまりパウル・シュミットは，ナチスの権力掌握にコメントを加えている。「私たちはすべてのうちに神の手をみることができる ―― 救いへの，裁きへの，いずれにしても歴史の完成への神の手を。……もっとも私たちは次のことを知っている。すなわちこのご主人様たちも水をワインに変えることはできないのだ，ということを」(パウル・シュミットは，国会の前議員として「このご主人様たち」を自分自身の

8) 例として以下参照。H.Schlick: Weder Sowjetstern noch Hakenkreuz, *Der Friedensbote,* 1924, Nr.44. – Arnold Köster: Hakenkreuz und Sowjetstern – Malzeichen des Antichristus!?, *Der Wahrheitszeuge*, 1932, S. 291f. – Naphtali Rudnitzky: Der Nationalsozialismus mit dem Herzen eines Judenchristen empfunden. In: *Die Kirchen und das Dritte Reich. Fragen und Forderungen deutscher Theologen* Ⅱ, Gotha 1932, S. 85-91.

9) *Der Wahrheitszeuge* (以下，WZ と略記), 1932, S. 347.

10) Alfred Bärenfänger, WZ 1933, S. 222f., 239ff.

観察から知っていたのである)。そしてさらに続けて言う。「しかし，私たちは神の手を見ており，また知っている。つまり神は誰であれご自身が欲するところの人を用いたもうということを知っているがゆえに，確信を持つことができるし，良きものを待ち望むことができるのである。私たちはそれゆえ祈ろうではないか，そして私たちは私たちにできる限りで，確実に助けようではないか」[11)]。

それに続くヒトラーの急速な「成功」の数々[12)]の中で —— 観念論的な歴史哲学によくあるように[13)] —— あまりにも連続的に神の「救いの」手を（ヒトラーの）仕事のうちに見てしまったこと，そして自ら自発的にそれに従ってしまったということ，それはドイツ帝国と〔第一次〕世界大戦の中で習い性になってしまったものの考え方，行動様式に属する。民衆の声は「悪魔（誘惑者）の声でもありうる」ということ，「その声は民族の血の声を神の声と取り違える」ということ，このハンス・ロッケル[14)]の警告は1933年の聖霊降臨祭の青年大会で語られたのであるが，それをロッケルの意図した通りに理解したものは少なかったと思われる。すなわち民衆というものは「神の啓示を必要としているのだ。生きた神の言葉を，つまりはキリストを必要としているのである。」そし

---

11) WZ 1933, S. 54. ——1932 年にパウル・シュミットはすでに書いていた（WZ 1932, S. 229)。「教会の左側にはむきだしの野蛮な神なき前線が形作られているが，右には国家の偶像化，人種と血の讃美への道が開かれている。左がキリスト教の抹殺を欲しているとすれば，右はキリスト教を骨抜きにし，従わせようと欲している。両者とも教会にとっては致命的である。教会は，教会の主であり支配者である方以外のいかなる霊にも，服従したり身をかがめることはできない。教会はいかなる種類の国家権力も，自らの上にあると認めることはできない。むしろ強くまた決定的に……キリストの使信を遂行しなければならない。」

12) 〔訳註〕ヒトラー政権初期の数々の成功（ドイツの経済復興，失業率の低下，再軍備とラインラント進駐）などは当時「奇跡」と呼ばれた。

13) 〔訳註〕ここではヘーゲル哲学が念頭に置かれているのであろう。

14) 〔訳註〕Hans Johannes Rockel 1906-1979 。バプテストの実践神学者。東プロイセンのケーニヒスベルクで生まれ，1924－27 年，バプテストの説教者神学校（ハンブルク）で学んだ後，チュービンゲンとハンブルクで牧師をしながら，当地の大学で哲学と神学を学んだ。戦後，（バプテストを中心とする）自由教会立神学校 Theologisches Seminar Elstal で実践神学を教えた（1946－71 年)。この発言は，ロッケルが 27 歳の青年のときのもの。

て「民衆の高揚と霊的な覚醒の間には天と地ほどの違いがある」[15)]。

しかし他の人々の視野の中ではこの「天と地ほどの」相違はすぐさま縮んでしまった。「1933年，すなわち歴史の転換の年」[16)]に。

> それは「私たちに神の支配と働きを素晴らしい仕方で示したのだ。……神ご自身が，我々の偉大な総統にして首相である人を，苦く厳しい青年時代に準備なさったのだ。そしてちょうど良い時に，すなわち我々没落しつつある民族を破滅の淵から引き上げ救出するための最後の時に，召し出されたのである。そして彼〔ヒトラー〕は最高のお方〔神〕の援助で短時間のうちに，なんとすべてを達成したことであろうか！　彼は神の正義と真実を頼みとして，山をも動かすほどの信仰によってその巨大な仕事へと接近していったのである。……我々の民族的首相はその根本命題と理念として聖書の思想と神の真理を持っているのである」[17)]。

一人の引退説教者の筆に由来するこの忠誠の誓いによって，〔バプテストの機関紙であった〕『真理の証人』誌は，この雑誌の読者たちに1933年の年末の挨拶をした。すなわち，「国家の記念の年」〔1933年〕を後にして，バプテストの祝賀の年[18)]へと歩みを進めることになったのである。そのような，今日では神学的に素朴すぎるし，危険でもあると認識されている信仰告白が，このあとの，もはや全面的に自発的だったとも言えない〔ヒトラーへの〕拍手喝采に，道を開いてしまったのである。そうした拍手喝采は，総統の誕生日や（ナチスの）党大会そして1939年11月８日事件や1944年７月20日事件[19)]のような政治的な事件の機会に行われたのである。いずれにせよ1933年，バプテストの人々はますます広くますます多く，「民族革命」への国民の大多数の高揚を分かち合うよ

---

15) WZ 1933, S. 266f., 276f., 283-285.
16) WZ 1933, S. 430f. (パウル・シュミット)
17) WZ 1933, S. 431. （Gottlob Maier）
18) 〔訳註〕WZ（『真理の証人』）誌はこの当時週刊であったが，頁番号は年間で通し番号を使っていた。ドイツのバプテスト同盟が結成されたのは 1834 年であり，1934 年がドイツのバプテストの 100 年記念の祝賀の年にあたった。
19) 〔訳註〕1939 年 11 月 8 日は，ゲオルク・エルザーによるヒトラー暗殺未遂事件。ミュンヘンのビアホールが爆破されたが，ヒトラーは少し前に出て行っており無事だった。1944 年 7 月 20 日事件については，註 80 参照。

うになった。この高揚は，のちの告白教会の人々でさえもとらえたほどのものだった。これに加えて高揚の実りをもたらしたのは，ヒトラー政権の経済的な初期の大成功であったし，またその成功の結果として起こってきた国民生活の安定化であったし，また同様に，1933年３月21日のポツダムにおけるいわゆる国家行事〔ヒトラーがヒンデンブルク大統領に忠誠を誓い，握手を交わした〕における，安心したと真面目に受け取られた[20]ヒトラーの表明，「私たちは国家の建設のためにはキリスト教の力は不可欠だと考えている」であった。しかしなによりも人々がナチスに期待したのは「世界共産主義の力に対抗する強い守護」（1936年のバプテスト同盟総会の出した「忠誠の電文」）[21]であった。

個々人は自発的に，しかし一般的な期待の圧力に屈してどんどん広範な人々がナチスに加入していったということ。そのことはヒトラーの中に全面的に「信仰深い」指導者をみることができるほどに政治的にはナイーブなお人よしに換言されることである。つまりヒトラーは，「どこからあなたは弱まることなきエネルギーを得ているのですかという質問に対してポケットからボロボロになるまで読んだ新約聖書を引っ張り出して質問者に見せたものであった」。そして，このこと（ヒトラーの信仰深さ）は私にとっては「非常に信頼に値する」と，H・オイラーはその回状「ナチスのバプテスト的メンバーおよびこの運動の友人たちへ」[22]において書き，次のように付け加えている。「新しい国家形式の権力および究極的な性格をめぐる闘いは素晴らしい結果に導くであろう」と（ドイツの多くのクリスチャンたちは「信仰深い元首」という作り話にまだ長い間しがみついていた —— 彼らがヒトラーの官僚たちの悪質さと野蛮さに長期間直面するまで）。

---

20) 〔訳註〕ヒトラー政権の誕生は，その危険性を心配されていたが，このおとなしい表明でほっとした人々が多かった。

21) Protokoll der Bundesversammlung,1936, S. 70. この時点でどのくらい（政権への）順応がすすんでいたかは，次の事実から明らかになる。すなわち，同盟総会はこの電文を同意の上で承認したのであるが，それは次のような原則が自らに適用されるにもかかわらず，であった。「あらゆる政治的立場，政治的関係や個人についてのあらゆる表明を，私たちはこの総会では控えるようお願いする。控えることをしない人間は，この総会の性質を破壊してしまい，自分の言葉と行為に対して全く個人的に責任を問われることになります」（ibid., S.55）。

22) 1933 年 7 月 3 日付の手紙。im Oncken Archiv Hamburg.

2．同盟における均制化？「指導者原理」という実験

バプテスト同盟の活動にとって歴史的な諸次元を獲得することになったのは，エポックの年1933年であった。それはバプテスト同盟評議会がハンブルクの「言葉」[23]に従ったこと，そして，同盟において，地方連合において，教会において，指導者原理[24]を導入したことによる。「民主的で議会的な原理はこの新しい（ナチス的）国家によってすでに追放されてしまっていた。そしてそれは私たちによっても，もはや以前と同じやり方では運用されることはあり得なかった」[25]。その背後には，一方では次のような不安があった。つまり，粉々にされたように思われる「新しい帝国教会」の大部分の人々が壁際においつめられて，場合によっては「均制化されて」しまうのではないか，という心配である。そして他方では，次のような希望があった。すなわちハンブルクの紛争[26]以来，未解決の，「唯一の同盟教会」という意味での同盟の存在意義を問う問いに共に答えることができるのではないか，という希望である。今や集団指導制の同盟事務局の代わりに選ばれた３人の「同盟長老会」Bundesältesten(!),

---

23) 〔訳註〕註 7 参照。七人の説教者たちが発表した言葉，つまり教会はあらゆる時代に①批判的に声を挙げ，②癒しつつ手を差しのべ，③伝道しつつ宣教すべきだ，という内容。特に最後の③が同盟の方針となり，社会的次元は後退した。

24) 〔訳註〕ヒトラー『わが闘争』上巻第 12 章によれば，指導者原理 Führerprinzip とは，すべてのグループが唯一の指導者をいただき，彼は上位者への絶対的服従とグループ成員に対する絶対的権威を持つという理念である。多数決による議会主義は，「人類のもっとも深刻な退廃現象」であり，指導者原理はこれと対立する，とヒトラーは明言している。もちろんすべての「指導者」Führer たちの頂点には，ヒトラー自身が究極の「指導者・総統」Führer として立つのである。

25) 前掲（註 7）の Balders 論文を参照。更にその続編として，Balders, Heilige Gefolgschaft, in: *Theologisches Gespräch* 3－4, 1979, S. 5-15. そこにもこの文が引用されている。

26) 〔訳註〕1871 年から 76 年まで続いたハンブルク教会の紛争。バプテスト同盟の創立者 Johann Gerhard Oncken 1800-1884 に対して，彼と共に同盟を指導してきた二人，Gottfried Wilhelm Lehmann 1799-1882 と Julius Köbner 1806-1884 が叛旗をひるがえして，独立した教会(Gemeinde) をハンブルク市内の Altona に設立した。激しい応酬があったが，結果としてはバプテストの各個教会主義を確認することで，1876 年に和解した。*Ein Herr*, S. 39ff. 参照。

F・W・シモライト，Fr・ロックシース，H・フェール[27]が，「無条件的に尊重されるべき決定権」を要求した。そして彼らはまた「同盟主事」Bundesdiakon たちに対してのみならず，各個教会に対してさえも力を及ぼすつもりであった。ここでは彼ら（同盟主事たちや諸教会）に対して，同じような全権を有する指導人格が対峙することになったのである。同盟評議会 Bundeskonferenz によって，高揚した気分で与えられたこの全権は，諸教会においてはしかし，積極的支持を広く見出すことはなかった。この教会の反響について，同盟長老たちの回状は無理やり楽天的に報告している。

「私たちの教会においては指導者原理を，同盟から提案されたような形では，そして政治生活においては当たり前であるような仕方では，拒絶しているのである。一致して表現されているのは次のことだ。すなわちこれまでの教会の慣習において，聖書の原則に従い続けるべきだということである」。同じようなことは，私の知る限りではカッセルの教会議事録において言われているだけではない。そして「同盟長老会の一つの新しい手紙が指導者原理について，本質的に第一の手紙よりも柔らかい表現でなされた。第一の手紙は，いたるところで活発な論争を引き起こしたし，議論を抜きにして承知されていたのであるが」[28]。

1936年の同盟会議の席上で，同盟長老会の人数は再び拡大された。フリードリヒ・ロックシース[29]だけが，従来の三人の同盟長老職から留任した。ただし，今回は第一議長としてであった。

---

27) 〔訳註〕Friedrich Wilhelm Simoleit 1873-1961, Friedrich Rockschies 1875-1945, Hans Fehr 1894-1979. シモライトは 1893-97 年，バプテスト説教者神学校で学び，Flensburg で 1900 年まで，次いで Berlin-Schmidstr. で 1919 年まで牧会した。1903 年からはバプテスト同盟事務局の担当者となり，カメルーン伝道のディレクター，ブランデンブルク州 Neuruppin の Bergemann 出版社の経営などを手がけた。1942 年にもう一度 Neuruppin の牧師になったが，1945 年に引退。cf. *Ein Herr,* S. 361f. ロックシースとフェールについては後述，註 29，55。

28) 1934 年 1 月 7 日付の回状。Dr. Klaus Fiedler の親切な教示による。

29) 〔訳註〕Friedrich Rockschies 1875-1945. 東プロイセン出身。1899-1903 年，バプテスト説教者神学校で学び，1907 年までブレーメン，1919 年まで Königsberg Klapperwiese，その後は Berlin-Schmidtstr. で牧師。1930 年にバプテスト同盟理事 Bundesleitung に選ばれ，1930-1932 年，1936-1945 年には理事長 Vorsitz となった。終戦の半年後，1945 年 10 月 8 日に死去。vgl. *Ein Herr*, S. 357.

とはいえ，全体主義国家に対して「統一的に」対処する必要性は，これまでと変わりなく存在し続けた。つまり，事実上強力な同盟指導という状況は続いたのである。たといそれがもはや「同盟長老会」の手中に排他的に握られているのではなかったとしても。この同盟指導はむしろ多種多様な細部に関しては，これからは一人のはっきりとした「天性の指導者」によって，すなわち1935年以後，職務に就いた同盟本部長 Bundesdirektor パウル・シュミットによって引き受けられることとなったのである。彼は，メソジスト教会の監督であったオットー・メレと共に1945年に至るまで，福音主義的自由教会連合のスポークスマンとしても，表舞台に立つことになった。

福音主義的帝国教会〔プロテスタント教会〕の側からは，1933年という時点ではっきりと文書によって，自由教会を自分たちに合併させることは考えない，ということが確認された。それはどんなにか感謝であったことだろうか。これに対応する説明はビラになって，パンフレットを配る人々に数多く提供された[30]。

領邦教会に対する100年に及ぶ緊張に満ちた関係の後だったので，バプテスト同盟の側からは，その当時始まっていた教会闘争に引きずり込まれないように人々は不安に駈られつつ努力した。そうだ，次のような欺瞞的な希望にさえしがみついて，それに没頭した人々もあったのである。すなわち，国家社会主義が大きな教会を粉砕してくれたなら，その後でいよいよ自由教会という王国の時代がやってくるというのである。ドイツ的キリスト者に対する（バプテストの）態度は，最初からしかるべき神学的な理由があって，実践の現場で拒絶的だったのだが，（他方で）最初は肯定的だった告白教会についての報告は，次第に口をつむぐようになってしまった。幾人かの人々（例えば C･A･フリュッゲ[31]）によって要求された告白教会との連帯は，残念ながらバプテスト独自の

30) Flugblätter für Gegenwartsfragen Nr. 73: Baptisten im Dritten Reich; zuerst erschienen 1934, ein Ex. von 1937 im Oncken Archiv Hamburg – Vgl. WZ 1933, S.405.

31) 〔訳註〕Carl August Flügge 1876-1948. ハンブルクの説教者神学校（1897-1901）を卒業後，ハンブルクの Eimsbüttel の教会で，夜回り活動などを通じて，アルコール依存症，ホームレス，若い女性の危機などの社会問題と取り組み，第一次大戦中はロシア人捕虜の救護活動にも取り組んだ。バプテストの社会奉仕活動「タベア Tabea」の設立（1907 年）の中心人物である。1921 年からはカッセルのバプテスト出版社（Oncken Verlag）の編集者となり，健筆をふるった。第二次大戦勃発前に，ナチス当局から言論活動を禁止された。戦前・戦中のドイツ・バプテスト同盟を代表する社会活動家である。cf. *Ein Herr*, S.345.

教派的宣教的な個性を求める声の合唱の中で回避されてしまった。そして今でも語り草の1937年のオクスフォードでの出来事[32]によって全く不可能にされてしまったのである。告白教会によって提起された諸問題は，バプテストの人々からは公式には連帯して徹底的に考え抜かれることはなかったし，連帯して戦い抜かれることもなかったのである。

3．1934年の世界大会 —— 疑いに満ちた成功

1933年には中止されたバプテスト世界大会が，1934年という記念の年〔ドイツ・バプテスト100年祭〕に，帝国政府の公開の招待と資金的後援のもとにベルリンで開催された[33]。というのは，この大会は，ドイツ福音主義教会の帝国教会大臣であったシェーフェルがはっきりと述べているように，「外交的な意味のみならずエキュメニカルな意味」をも持っていたからである[34]。バプテストの出版物はどれも大会が成功裏に終わったことについての歓声で満ちていた。言論の自由は保障されており，ナチ政治や人種問題に対する慎重にではあるが批判的な表明でさえもなされえたし，大会報告書の中で公開されえた。もっともいずれにせよ賛同しつつの表現ではあったが。

ドイツの講演者たちの中でとりわけ長い射程で勇敢に突き進んだのは，パウル・シュミットであった。というのは，彼は「国家主義」についての自分の講演の中で，「教会および諸民族世界に対する神の秩序付けを宣べ伝えよう，そしてお互いの間のあらゆる間違った融合を阻止しようではないか」と呼びかけ，以下のことを勇敢に確認したからである。

---

32) 〔訳註〕この論文の第 4 章を参照。

33) 〔訳註〕ヒトラーはこの時期，世界的な大会をドイツで開催することを好んだ。その頂点が，1936 年のベルリン・オリンピックである。

34) 詳細は，Armin Boyens: *Kirchenkampf und Ökumene 1933-1939. Darstellung und Dokumentation*, München 1969, S. 104, 353f. – G.Kösling, *Die deutschen Baptisten 1933/1934*（註 3 参照）, 269ff. – K. Zehrer, *Die Freikirchen und das "Dritte Reich"*（同）, S. 186ff.

「国家というものは常に国家自身の生命の，そして権力と影響力への国家自身の憧れの明文化されざる法則を，事情さえ許せば，キリスト教徒の要求や考え方に対して厳しい仕方で徹底的に貫徹する傾向がある。国家というものは，国家自身の国家主義的な生の感情から，キリスト教的共同社会倫理を根拠に国家に対して警告を発する人々を決定的な瞬間に排除しようという傾向を持っている。そしてそれはまた，現在に至るまでの様々な例が証明しているように常に成功しているのである。」[35)]

「*Die Botschaft der Baptisten im Echo der Presse*（出版物のこだまの中にあらわれたバプテストの使信）」というこの雑誌はこれまで出版されたものよりもずっと多様な仕方で，特にパンフレットの形で人々の元に届けられた ―― とはいえその後ゲシュタポによって発禁になったのであるが。私たちに冷水を浴びせかけるのは，少なくとも私たち今日の人間にとってみれば，そこでは紹介されていないこの大会への〔ナチズムからの〕「評価」であった。「総統からナチスの世界観的・精神的教育全体を監督するために任命されていた顧問」，アルフレッド・ローゼンベルク，すなわち有名にして悪名高い『20世紀の神話』の著者は，〔バプテスト世界大会という〕出来事を彼なりの方法で利用したのである。

「妨げられることもなく，むしろ国家によって歓迎されて，つい先日ベルリンでバプテスト世界大会が開催された。そして私たちが望むのは，この大会の参加者たちがドイツ民族の宗教的寛容についてもよい印象を共に携えて，それぞれの母国へと持ち帰ることである。これに反して私たちが抗議したいのは，次のことである。すなわち，古臭い宗教の者ども[36)]が小さな宗教的グループを抑圧するために国家権力を要求する，ということである。そしてこのようなこと（抑圧）が起こらないものだから，しばしば思うようにならないという不当な抗議が声高になってしまうのである。」（『*Völkischer Beobachter*（国民の目撃者）』1934年８月22日号）

35) Walter Harnisch, Paul Schmidt (hrsg.): *Fünfter Baptisten-Welt-Kongreß. Deutscher Bericht*, Kassel 1934, S. 204-210 (209). パウル・シュミットの講演は，Kösling の前掲書で詳しく紹介され，評価されている。*Die deutschen Baptisten 1933/1934* , S. 337ff.

36) 〔訳註〕ドイツ福音主義教会のこと。

こんな風にご機嫌を取られてバプテストの「自由教会」からは1934年にすでに少しばかり自由が失われたのである。――そして同様の拍手は，同じ連中によって，続いて1937年にもう一度あったのである！[37]「墓地の嫌がらせとあらゆる仕方での些細な侮辱，そして意識的でわざとらしい差別待遇，これらはもはや可能であってはならない」[38]――教会政治という大きな枠組みの中におかれたドイツのバプテストの小さな世界なのであった。

その際，根本的に明らかだと思えるのは，そして深い意味でも明らかだったことは，パウル・シュミットの見解が推測させているように，「実際今はまだ寛大に扱われているドイツの自由教会」の自由は，それほど昔からのものではなかったし，またいつまでも許されたままではないであろうということ，つまり「この自由は自分と何の関わりがあるのか」[39]をそのうち経験する，ということである。こうして例えばバプテスト青年同盟 Baptistischer Jugendbund は他のあらゆる青年団体と同様に〔ヒトラーユーゲント以外は〕1934年に解散させられたのである。とはいえ，教会に深く定着していたおかげで「教会青年活動」という新しい形を見つけることに成功したのである――たとい，とりわけ教会間，地方連合間の活動（聖書研修修養会 Bibelfreizeiten，学習会 Schulungen など）はつねにより大きな困難の前に立たされるのを経験したとはいえ[40]。

---

37) 〔訳註〕次章参照。バプテストは国家社会主義から褒められて，それと引き換えに自由を失っていった，という意味。次の引用文も，ドイツ福音主義教会に対する積年の反感が，バプテストから広い視野を奪ったことを示した例として用いられている。

38) WZ, 1933, S. 347.

39) Karl Barth, Zwinglikalender 1939. 註 47 参照。

40) 青年同盟の全国レベルでの責任は，Hans Rockel, Auguste Lieske, Hans Arndt に委ねられていた。詳細は，Karl-Heinz Walther: Die Geschichte der Jugendarbeit der deutschen Baptisten von Anfängen bis zur Gegenwart, 1834-1958 (1958 年の未公刊のレポート，Oncken Archiv Hamburg), S. 81ff. –Neuordnung und Gestaltung der Gemeinde-Jugend. in: *Jungbrunnendienst* Heft 5, 1935. --青年団・少年団の従来の仕事を，人々は可能な限り維持しようと試みた。「10 歳から 14 歳の少年のための奉仕」（Willi Grün 1935，上掲レポート S. 80ff.）は，ヒトラーユーゲントの存在にもかかわらず，はっきりと「各個教会青少年活動の課題領域」に属するものとされた。Helmut Simoleit が従来の「全国少年団係」の仕事を引き受け，Herbert Thomas がこの領域の指導を引き受けた。cf. Lothar Nittnaus, Reinhard Schwarz: 1930-1980, 50 Jahre Jungschararbeit des Bundes Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden in Deutschland, Hamburg 1980, sowie Herbert Gudjons: Jungschararbeit im Hitler-Staat, *Die Gemeinde* 1980, Nr. 2-5.

4.「私たちは伝道者であり続ける」――いかなる犠牲を払っても

我々ドイツ・バプテスト同盟共同体が第三帝国において歩んだ道を表現するのに適した標語と言えば，フランツ・リューラウ[41]がその著書名に選んだ言葉「我々は伝道者であり続ける Wir bleiben Missionare」をおいて他にはないだろう。たしかに1933年の時点で人々が認めねばならなかったことは，あの（ナチズムの）民族の「鎮静化政策 Beruhigung」がこの伝道という仕事を必ずしも容易にはしなかったということ，つまり，たとえば天幕伝道 Zeltevangelisation を訪問しようというようなことへの関心は目立って弱まっていたということである。とはいえ，内務省から好意的に，〔国家にとって〕安全だとのお墨付きをもらったおかげで，天幕伝道やキャラバン伝道 Wagenmission は，続行することができた。しかも「帝国宰相（ヒトラー）が福音主義教会の事柄について全権委託をした人物」つまりのちに帝国監督となるルートヴィヒ・ミュラーは1933年７月に次のような証明書を出していたのである。「この伝道奉仕の唯一の目的は，神なき運動[42]を内的に克服しようという特別な目的をもった屋外での単純な大衆的宣教である。この大衆伝道は，各種の政治活動からは遠い」[43]。

自由教会の二人の代弁者が，1937年オクスフォードで開かれた「教会，民族，国家」についての世界教会大会で行なった自由教会の自己理解に典型的な表明は，この同じ方向を向くものであった。パウル・シュミットとオットー・メレ[44]は，教会闘争の真っただ中にあったＤＥＫ（ドイツ福音主義教会）の代表者た

41) 〔訳註〕Franz Lüllau 1888-1964 は，1919-1922 年ハンブルクの説教者神学校で学び，続く 8 年間，Frankfurt/Oder で，2 年間，Berlin-Weißensee で牧師をつとめた。説教の才能を生かして，1932 年からはバプテスト同盟の大衆伝道者 Bundesevangelist になった。途中，一時的に個別教会の牧会を引き受けたこともあったが，1954 年の引退まで基本的には大衆伝道者であった。バプテスト同盟における天幕伝道 Zeltarbeit のパイオニアの一人と見なされており，戦後の天幕伝道再建にも深く関わった。cf. *Ein Herr*, S.352.

42) 〔訳註〕政治に介入しようとする告白教会のことである。

43) 1933 年 7 月 25 日，ベルリン（L. Müller）。―Der Reichsminister des Innern. (内務省記録), Nr. 1B 3070/26. 7. Berlin, den 8. August 1933.　この文書は，Oncken Archiv Hamburg の複写資料による。

44) 〔訳註〕Otto Melle 1875-1947. ドイツ福音主義メソジスト教会 EmK（Evangelisch-methodistische Kirche in Deutschland）の司教。

ちとは違って，オクスフォードへの旅を許可されていた。そしてオクスフォードでは1937年７月21日のドイツの使信報告において，大声で「終始一貫して非常に効果的なやり方で個人的な談話においてもそれ以外においてもナチス的ドイツを弁護する」ことになっていた[45]。公的な騒動にまで発展したのであるが，二人が驚いたことに，この会議はある決議文の中で，「ドイツ福音主義教会からの兄弟たちがこの会議に参加できなかったこと」は遺憾である，とし，弾圧された教会の側に味方したのである。(私たちの会議は)「数多くの牧師たちや信徒たちの苦闘によって深く感動させられている。彼らは全くそしてすべての始まりから，告白教会において，キリストの支配とキリストの教会の自由のために，キリストの福音を宣べ伝えることに献身して来たのだ」。パウル・シュミットは，この文書を『真理の証人』誌に掲載させ，同時に，メレ司教によって口頭で短く講演された反対声明をこれと対置させた[46]。この反対声明では，次のように言われている。

「ドイツ福音主義自由教会連合は，次のことに感謝しています。すなわち私たちはキリストの福音を宣べ伝える自由を制限されておりませんし，またドイツにおいて伝道と牧会と社会的配慮と社会建設においてなすべき私たちの奉仕を実行する機会を与えられているということであります。」

ジレンマの中から発表されたものではあるが，このメレの態度表明はドイツ国内に限らず，世界的にある憤激の嵐を呼び起こした。カール・バルトはこの出来事を次のように文章化した。「オクスフォードに出席していたドイツの自由教会（メソジストとバプテスト）の代表たちにとって，この機会に告白教会の背中を突き刺すことが正しいように思えたということは，驚くべきことであり，恥ずかしいことであり，しかしまた教訓的でもある」。そしてバルトは上記のコメントのあとで「実際今なお大目に見られているドイツの自由教会」に

45) 詳細は，Armin Boyens, *Kirchenkampf und Ökumene 1933-1939* (註 32), S. 105, 144ff. 353ff を参照。この引用文は，S. 361.
46) WZ 1937, S.267-269.

ついて触れた後で，以下のような言葉で締めくくっている。

「さしあたり，彼らが証明したことは，正しい教会であるためには，国家権力から表面的に「自由な」教会であるということではまだ不十分だということである。正しい教会であるためにはもう一つ別の自由が現に必要なのである。その自由こそ，ドイツのメソジストとバプテストが明らかに所有していないものなのである。」[47)]

拍手はもう一度，「別の側」からやって来た。「オクスフォードに出席したドイツの自由教会および古カトリック教会を褒め称えるために以下のことが書き留められるべきである。すなわち彼らは，この〔世界教会大会の〕思い上がったメッセージに対して断固とした抗議を申し入れたのである」（アルフレッド・ローゼンベルク）[48)]。パウル・シュミットはしかし，次のような考えであった。「（自由教会がオクスフォードで語った）言葉は我々の祖国の内部でも外部でも非常に広範な反響を見出した。このことは自由教会の務めが祝福された実をつけるであろうこと，そしてもしかすると教会の危機をのりこえる新しい道を見つけるための衝突でもありうるということを，期待せしめるものである。」[49)]

今日の読者にとっては状況判断が対立的であるのは明らかであるが ―― つまり，一方には闘争あるのみでキリスト教会の自由はないし，他方では「福音を宣教する自由は制限されていない」のであるが ―― 両方の側とも「宣教の自由」という言葉によって別のことを考えていたということであるのみならず，宣教のどうしても必要な内容についても異なった仕方で考えていたということなのである。最終的に重要なのは「イエスは我が主である」と告白することで十分であるかどうか，という問いである。自由教会はその伝道的な伝統にのっとってこの告白こそ大事だと言っていた。他方，告白教会は ―― 大変な努力をして ―― すでに次の段階へと到達していた。すなわち，キリストの支

47) Karl Barth, Zwinglikalender 1939, zit. nach: Karl Barth zum Kirchenkampf, in: *Theologische Existenz heute*, NF49, München 1956, S.53f.
48) Alfred Rosenberg, *Protestantische Rompilger*, 8. Aufl., München 1937, S.73.
49) WZ 1937, S.269.

配をより大きな射程を保ちつつ証言するということ，そしてドイツ的キリスト者と対決しつつはっきりと「国家が自分に与えられた特別な委託を越えて人間的生活の唯一の全体的な秩序となり，それゆえ教会の規定を満たすべきであり，また満たすことが可能だ，というような誤った教え」（バルメン神学的宣言第5項）を退けたということである。短く定式化して言うと，イエス・キリストは（自由教会の言うように）「我が主」であるだけではない。むしろ彼は唯一の主なのである。さらに自由教会はまだまだ，神学史的にこれまで支配的だったドイツ・ルター派の伝統によって囚われていたのである。その伝統とは，歴史を見る中でイエス・キリストと並んで「キリスト以外の出来事や諸力や諸形態や諸真理をも神の啓示だ」と認めるものである（それらが「宣教の源泉として」無用であることを1934年のバルメン宣言は，その第１項においていずれにせよはっきりと示していた）。ここで引用されたバプテストの文章は1933年のものであるが，それは，例えば1914年に皇帝と戦争について述べた言葉と，いまだに同じ言い方をしているのである。

5．日常的な経験と非日常的な困難

私たちは今日，当時の世代が知ることのできたよりもずっと，なにゆえ，そしていかなる枠組みにおいて自由教会の活動やその伝道活動が可能だったかについてよく知っている。1937年７月18日付の親衛隊全国指導者[50]の作業指示の中に次のような文章がある。それは，教会の均制化が失敗したのちに，キリスト教との闘いが「公的生活の脱宗教化」という標語のもとにすでに最高潮に達していた時点の指示である。「無害な教派ども Harmlose Sekten は…さしあたりは顧慮なく存続させておこう。それは根本的に当然のことながら，教会的宗教的な領域に存在している分断状態をなんとかしてやめさせようということに関心があるのでは全くない」。その逆である。「無害な教会を保護するということ」は「国家に敵対する他の教派どもを崩壊させ，教会的・宗教的な領域に

50) 〔訳註〕ハインリヒ・ヒムラーのこと。

おける分断を促す」のである[51]。

教会闘争の嵐が吹き荒れる影で，バプテストの伝道活動や教会活動が営まれたのであるが，それらはとりわけその活動の現場で無数の困難にさらされていた。この事実は，述べないままで済ませるわけにはいかない。多くの説教者たち，冊子配布者，その他の協力者たちは数多くの尋問，妨害，禁止，まさしく一時的な逮捕拘禁までをも勇敢に甘受したのである。人々はつねに監視されていることを覚悟しなければならなかった。聖書研究修養会や，あるいは教会青年のスポーツ活動でさえも，繰り返し禁止されたものである。それにも関わらずそれらは何度も開催された。とにかく使える場所がなかったということなのだ。つまり，従来よく知られていた日常的な経験によるケースについても，あるいは戦争の開始以来たび重なっていた非日常的困難のケースについても，そのつど開催場所がなかった[52]。面白いことだが，終末の出来事を待望したグループの人々は，広範囲ですでに長らく活動実績があったが，彼らは少なからず明瞭に，〔ナチスの〕全体主義的政権が反キリスト的・神敵対的性格を持つことを認識していたのである。「当時『白騎士』[53]についての本が信仰者たちのサークルにおいて手から手に渡されて，読まれたものである。結局ヒトラーこそ実はアンチ・キリストなのではないかという問いが，ほとんど燃え上がるように迫ってきたのである」[54]。このような背景のもとで，「帝国領域における我々の説教者たちへ」という1940年10月７日の報告もまた理解されよう。この報告は，バプテスト同盟の「公式の」路線にとっても同様に特徴的な報告である。

---

51) *Zeitschrift für evangelisches Kirchenrecht* 3 (1953/54), S. 374-397(引用は S. 377). – Vgl. Heinzpeter Hempelmann: Das Verbot der »Christlichen Versammlung«, 1937 (Hausarbeit für das theol. Fakultätsexamen, Tübingen 1982), S. 18.

52) 〔訳註〕バプテストは，全国集会などに使える自前の大きな施設がなかった。公的施設を借りて集会をするために申請しても，許可されなかったのである。

53) 〔訳註〕白騎士 der Weiße Herzog は，終末時に出現する４人の騎士（黙示録６章）の一番手。

54) Wilhelm Nitsch: *75 Jahre Westdeutsche Evangelische Allianz 1880-1955*, Witten 1955.

我々（バプテストの）説教者である，N在住の兄弟K（原註：東プロイセン・ノルデンブルクの W. Krause 牧師）はある特別法廷によって，正式に 4 年の刑に処せられた。というのも，彼は牧会の中で，牧会者にふさわしい態度をとることなく，むしろ総統をひどく侮辱するという罪を犯したからである。訴訟手続きの係争中，兄弟Kはあるバプテスト同盟教会の説教者としての義務と権利から暫定的に解任された。判決ののち，説教者リストからの最終的末梢が完了した。P在住の兄弟M（原註：フォークトラント・プラウエンの O. Meinhold 牧師）に対しては，訴訟がまだ係争中である。兄弟Mは，黙示録 6 章 1 - 2 節の言葉の解釈において国家の安全と総統の安全に対して，とりわけ戦時下においては抵触してしまうような表現をしてしまったことで，罪とされている。両方のケースにおいて私たちは，彼らに対して提起された訴訟の中で 2 人の兄弟を支え，正義を見出すためにできるだけのことを行なった。他方，2 人がやってしまったこと全体のありようがどのようなものであったかを，明瞭に表現することが，不可欠である。それはドイツのバプテスト教会に対して間違った推論が行われることがないようにするためである。とりわけ強調する必要もないことだが，私たちすべてにとって，もし私たちの一人が私たちにとってよく知られまた強調された基本線を守らず，それによって福音が線をひいた限界を超えて出ていってしまい，それによって再び私たちがその人をかばうことができないようになってしまうとするならば，それはどんなにか残念なことであろうか。くりかえし私たちは真剣に，また友情をこめてお願いしてきた。つまり，それぞれ責任をもって，また福音と我々の教会を顧慮することにおいて，聖書自身が与えてくれる態度を絶対に守るように，また現代の出来事が私たちに要求している態度を守るようにという願いである。

私たちは私たちの教会の説教者として, 牧者 Hirte として, 牧会者 Seelsorger として, 神と人々の前で共同的な責任を負っている。その責任に目を留めて，私たちはさしせまってもう一度，私たちが次のことに注意するようにと願いたい。

1．これまでと同じようにこれからも私たちは福音の全体を，喜びをもってまた何はばかることなく宣教することができる。いかなる場合にも，福音宣教において私たちには制限が課せられていない。

2．私たちは自分自身の主人でもなければ，自分の見解の主人でもない。その見解を私たちはひとつあるいはいくつかの聖書個所について形作るのであるが，とりわけそれは様々な預言者的なイメージや彼らの約束を念頭において形作られるのである。ぜひ忠告したいのは，聖書自身が終わりの出来事を見るときに秘密を守っているのだから，その秘密を守るべきだということであり，また聖書解釈において，自分自身を見失わないようにすべきだ，ということである。その解釈について真剣な意味で責任を

引き受けることは，私たちの誰にもできないのだから。

3．（略）

4．聖書の終末史的な叙述は，聖書全体への関連において厳密な解釈をするべきものである。この全体への関係においても注意を払い，そして何よりもすべての事柄を前にして，主イエスご自身がなさった自制をするということが得策ではないだろうか。

5．私たちは時代の転換期に生きている。…（中略）…福音を告げ知らせる者は，まさにそのような時代の中で神の支配を歴史の中でも見ることが許されている。そして彼は，神がいかにして世界史を土台としてまた救済史を土台として人々に声をかけ，また人々に特別な行為をするよう委託をなさるかを，認識することがゆるされているのである。

6．（略）

バプテストの兄弟たちは知っている。私たち（バプテスト同盟）は公的な法の定める団体なのであってこの団体を通じて私たちは様々な要請や救援を経験してきたし，今なお経験しているのである。この私たちの立場の枠の中で，私たちはお互いを守ったり助けたりすることができるのだから，私たちは福音の線を心の中で守るように，そして政治生活の領域へと自分を見失わないようにと，拘束されてもいるのである。この政治生活の領域はこの領域に責任を持っている人々に委託されているのである。…（後略）…

心からの兄弟のあいさつを送る。同盟理事会の名において。みなさんの兄弟，フリードリヒ・ロックシース，パウル・シュミット」

同盟の責任者たちは，手書き資料の証明するところによれば，「キリスト教は新しいドイツの建設にとって有害，あるいは少なくとも妨害になるとして，抑制すべきだという（ナチスの）意志がどんどん強くなってきている」ということをずっと前から認識していた（Hans Fehr 1940年）[55]。しかし，（同盟の）

55) 1940 年 8 月 21 日の手紙。これはほとんど言葉どおり，ハンス・フェールが議長を務めた 1940 年 8 月 20 日の戦時バプテスト同盟理事会 Kriegs-BL の議事録と同じである。〔訳註〕Johannes Hans Fehr 1894-1979 は，説教者 Gottlieb Fehr の息子としてエルバーフェルトで生まれた。商業学校卒業後, 1920-23 年バプテスト説教者神学校で学び, 1931 年までハンブルク第一教会で牧師としてつとめた。彼はその後も生涯，この教会の会員だった。1931 年にディアコニッセンハウス「シロアー」Siloah〔病院や施設で奉仕する献身看護婦の共同体〕のディレクターに招聘され, 1965 年までその職にあり, 1941 年以後附属病院つきの大きな組織 Albertinenhaus に成長するのを指導した。1933 年から 1965 年まで, 一時期を除いてバプテスト同盟理事。1951 年からは理事長。cf. *Ein Herr*, S. 343f.

責任者たちは「無抵抗」というかつてはうまくいった道にとどまろうとしたのであり，ほかの人々をその道へと連れ戻そうと努力したのである。それは，パウル・シュミットが1946年に回顧しながら述べているように「福音の奉仕者を…あまりに早く危険にさらすことのないため」であった[56]。

そうした〔終末待望的傾向の〕人々のグループがどれほど強かったのかは，私にはよくわからないのだが，彼らは当時の出来事を判断するために，たとえばローマ書13章のあとで，たとえば黙示録13章をも引き合いに出したのである。そしてそこで獲得された救済史的・終末史的観点を証言する用意があったのである。同盟理事会 Bundesleitung は1940年に以下のことを確言した。「教会そのものには証言や祈りに全力投入する意思は今のところほとんどない。ぜひ必要だと思われるのは，教会や説教者への強い励ましであり，また十分注意するようにとの真剣な助言である」。このことは同じ会議で記録責任者ハンス・フェールが書いた個人的な手紙でより明らかになる。「私が恐れているのは，この説教者たちがあまりにも遠くひとつの対立にまで至ってしまい，それが別の立場の人々をそれだけいっそう刺激してしまうということだ」[57]。

これと対応するこの「別の立場の人々」（ナチス）の覚え書きは，いずれにしてもこの間，判明している。

> 「『バプテスト』の連中は，すでに昨年においてもそうだったのだが，同様にこの報告期間においても帝国のそれぞれ別の領域，とりわけ東プロイセンとシュレジエン地方において，いわゆる伝道週間を実施した。これらの行事をより面白く実行するために，多くの場合には外部からの講師が説教者として雇われた。彼らの説教そのものの中にナチ国家に対する拒否的な態度や親ユダヤ的立場が見てとられる。」（ゲシュタポ報告書1939年）[58]

56) Paul Schmidt: Unser Weg als Bund Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden 1941-46. Bericht an den Bundesrat in der Sitzung vom 24.- 26. Mai 1946 in Velbert, Stuttgart 1946, S. 8.

57) これら二つの引用について，註 55 参照。

58) Heinz Boberach: *Berichte des SD und der Gestapo über Kirchen und Kirchenvolk in Deutschland 1934-1944*, Mainz 1971, S.345.

6．ユダヤ人問題についてのバプテストの態度

バプテストの説教者たちの「親ユダヤ人的立場」についての上記のコメントは，彼らが，残虐に弾圧されついには絶滅させられたユダヤ人たちのために，勇敢に味方になったのだと誤解してはならない。いわゆる「非アーリア人の」教会員や説教者たち個々人のための救援活動は慎重であり，時には勇敢でもあったのだが，だからといって次のことについて思い違いをしてはならない。すなわち，被害者たちは次第に存在すら抹殺されるような弾圧を受けると共に，教会の中においてすら隔ての壁（エフェソ2章14節）が作られるという事態を受け止めねばならなかった。それは，人々が彼らユダヤ人を避け，彼らを後列に追いやり，そして ―― ベルリンでは ―― ある特別な教会に可能な限り集まるようにされることによってである。パウル・シュミットのような人はこの教会に密接な個人的接触を保っていた[59]。このことは，隔ての壁の両側で，直接的な被害者のための心遣いを決して忘れずに取り組んでいる人間が実に多様な姿を持っていたということの一例である。

ユダヤ人問題については，慎重に遠ざかってやり過ごすような表現が ―― 「人種の異質性を尊重（Achtung）しよう」が，「排斥（Ächtung）しよう」になってしまってはならない ―― バプテスト関係の人々からの多かれ少なかれ明らかに反ユダヤ主義的な表明のような形で伝わっている[60]。バプテスト同盟の側では，「ユダヤ人問題」によって，実は，教会はイエスの教会なのか，という反問が投げかけられているということ，それはすでに意識されていたと思われるのである。しかし，人々は可能な限り沈黙を決め込んでいた。

「新しいユダヤ人法〔ニュルンベルク法〕は根本的に，この領域における新しい正義を作りだしている。その最終的な影響は，今日ではまだ見通すことができない。注目す

59) Clara Eggert の報告をも参照。in: *Die Gemeinde* 1961, Nr. 17, S.11f.，これについて，Dieter Kroll (hrsg.), *Evangelisch-Freikirchliche Gemeinde Hamburg I*, 1983 を参照。

60) WZ 1935, S.258 (H. Euler) から引用。以下も参照。A. Bach: Der Christ und die Judenfrage, in: *Der Hilfsbote*, 1933, S.108ff., F. W. Simoleit: Wie es im neuen Deutschland aussieht. in: *Sendbote* (Rochester, USA), 1933, Nr. 50.

べきことは，国会がこの法を，ニュルンベルクで制定したということである。私たち〔バプテスト同盟〕の法的状況と伝道状況については，本質的な変化は出て来ていない。私たちに関わる要件はすべて，これからも教会大臣が担当している。ただし決定的なのは，活動的なキリスト教が大きな生存の試練に立ち至っているということである。この試練の中で，キリストの力は保持されるべきなのである。このことが重要なのは，宣教において，個人的な証示において，そして神によって定められ結ばれた生活指導と教会形成の叙述においてである。」[61)]

しかしそれでもなお,「少なくともキリスト教に改宗したユダヤ人の差別を，公的に退けようとする……勇気は表明された」のである。フリードリヒ・ゾントハイマー[62)]がベルリンで行なったユダヤ人キリスト教徒シュマール氏の葬儀について，『突撃者』[63)]で配られた下品なパンフレットがあったのだが，それに対してバプテスト同盟は1936年12月17日に，帝国教会省に抗議を表明した[64)]。

「私たちは，私たちの教会にいる何人かのユダヤ人キリスト教徒を，教会のメンバーとして扱い，彼らを晩餐式においても婚礼の祭壇においても同等の権利のある者として扱うことを，間違いだとは考えていません。」

ことの結末は，バプテスト同盟理事会の1942年1月3日の議事録に，コメント抜きで記されている。

「アルザス地方の〔バプテスト〕教会は，自分たちの教会規定をスティコ[65)]に提出した。

61) *Bundespost*, 1935, Nr. 6 (Paul Schmidt).

62) 〔訳註〕Friedrich Sondheimer　バプテストの説教者で著作家。*Die Wahrheit bei den Täufern. Ein frohes Bekenntnis zur Taufe der Gläubigen*, 1938; *Die wahre Taufe. Ein Bekenntnis zur Taufe der Gläubigen*. Kassel 1951　などの著作がある。

63) 〔訳註〕『突撃者』der Stürmer　は，ナチス党員 Julius Streicher によって 1923 年に創刊された週刊新聞で，反ユダヤ的な記事を毎号のように掲載した。正式にはナチスの機関紙ではなかったが，裏ではつながっており，「突撃隊」Sturmabteilung　と同様に，汚い仕事や煽動を引き受けた。1945 年の敗戦で廃刊。

64) Zehrer (註 3 参照), S. 287　による。.

65) 〔訳註〕「スティコ」Stillhaltekommissar für Organisation, Vereine und Verbände　とは，ナチス時代，ドイツが合併した領域に配置されて，法人の均制化あるいは抹消を司った役職名。

この規定の中には，アーリア条項および指導者原理が受け入れられている」。

手紙のやり取りからわかることは，ユダヤ人「追放」が―― 当時の名称が何であれ―― 確実にまた意識的に容認されたということである。

「私は，総統が〔聖書の〕ユダヤ人に関する文書の実行者であると考える人々と……意見を共にしてはいない。総統は，ユダヤ人にパレスチナに行くよう割り当てるような人々の一人ではありえない。なぜなら彼は，ユダヤ人はすべて荒地に送って，アラブ人にパレスチナの全土を与えたいと考えているからだ。聖書のその箇所を実行する者は，一人しか，ないしは強く聖書を信じている一つの民族しかありえない。そしてこの民族は〔私たちとは〕また別の側にいるのだ。今や，とにもかくにも，なるがままにしておこう，私はその旅の行方を知っているのだ！」[66)]

なぜなら，ますます「神の眼球」（ゼカリヤ2章12節）が触れられたということ〔神の愛する民が迫害されたということ〕が，多くの人々の心を憂慮で満たしていたからである。一つの確かなシグナルは，旧約聖書を物笑いの種にし，しだいに排除していくことであった。もし人々が，ドイツ・キリスト者の「英雄的イエス」像とは一線を画すことができたとしても，今度は，ナチ国家が宣教の基盤〔である聖書〕に手をつけるかもしれない，という危険が起こってくるのである。「今や，ユダヤ人のヨーロッパからの追放は成就した。君は，連中が私たちに，ユダヤ人の本〔旧約聖書〕を任せてくれると思うのかい」と問うたのは，ハンス・ルッキーであった。彼は，答えは否であるに違いないと知っていたのである[67)]。

---

66) Rudolf Bohle の1940年12月24日付の手紙（Hans Luckey宛）(Oncken Archiv Hamburg)。

67) 1941年11月4日付の手紙(Oncken Archiv Hamburg)。おそらく自由意志によってではないが，ディアコニッセンハウス「シロアー」Siloah の名称（註55参照）を1941年に恥ずかしいことに “Albertinenhaus” に改称した（この名前の後援者は在世である）のも，事柄としては同じ文脈〔旧約聖書の名称を避ける〕に属するのである。－同じ時点で，「タベア Tabea」（註31参照）はその名前を保持している。同様の実例については後述する。〔訳註〕シロアー（ヨハネ9：7）やタベア（使徒9：36）は，新約聖書にも登場する固有名詞であるが，語源はアラム語ないしヘブライ語である。

「あなたの口を開いて弁護せよ，ものを言えない人を，犠牲になっているすべての人の訴えを」，この旧約聖書の御言葉（箴言31章 8 節）によれば，私たちバプテストは，大多数のドイツ人と同様に，ユダヤ人のためにも，いわゆる安楽死させられた人々〔障碍者〕[68]のためにも，あまりにもわずかしか行動しなかったのである。

7．戦争の影の中で

オーストリアおよび〔チェコの〕ズデーテンラントがドイツ帝国に「帰還」したことは，広く歓迎された。そして ――「われわれは宣教者であり続ける」―― アメリカ人によって開始されたドナウ川流域諸国[69]伝道は，ドイツのバプテスト同盟の責任へと引き継がれ，とりわけオンケン時代[70]以来の歴史的関係が維持された。

第二次世界大戦勃発〔1939年 9 月 1 日〕の時点では ―― 1914年とは違って ―― 歓声は起こらなかった。たとい，「歴史を操縦する者」（Lenker der Geschichte）がもう一度面倒を見てくれて，「ドイツ民族に，この方（神）がめったに許し与えないもの，すなわち軍事的に達成するものに精神的な基礎を与え，

68) 〔訳註〕「安楽死作戦」Euthanasie-Aktion とは，ヒトラーの秘密命令によって，心身障碍者を「生きるに価しない生命」と見なして強制的に殺害した措置のことである。1939 年から 1941 年までに約 20 万人が，障碍者施設から「灰色のバス」で移送され，殺された。詳細は，河島幸夫『戦争・ナチズム・教会』新教出版社 1993 年を参照。

69) 〔訳註〕ドナウ川およびその支流が流れる地方。川の上流から言うと，ドイツ，オーストリア，スロヴァキア，ハンガリー，クロアチア，セルビア，ルーマニア，ブルガリア，モルダヴィア，ウクライナなどの諸地方を含む。その各地に，ドイツ語を話す人々が住んでいた。

70) 〔訳註〕オンケン Johann Gerhard Oncken 1800-1884 は，ドイツ語圏のバプテスト教会の生みの親であり，1834 年 4 月 23 日に，オンケンおよび 6 人の信徒が，アメリカの宣教師 Barnas Sears によってエルベ川でバプテスマを受け，ハンブルクに教会を設立したのが始まりである。オンケンはその後，領邦教会からの妨害も受けたが屈せず，各地に多くの教会を設立した。彼は信徒の一人一人が「宣教者」Missionar である（「われわれは宣教者であり続ける」）として，積極的に伝道をおしすすめ，オンケンが亡くなった時点（1884）で，ドイツ語圏のバプテスト教会は，165 教会，3 万人以上の信徒を数えた。この創立期の 50 年間をここでは「オンケン時代」Onckens Tage と呼んでいる。cf. *Ein Herr*, S. 25ff.

政治的に蓄積したものを外交的にもたらす政治家を，プレゼントされたとしても，である。それは血塗られた鎌で刈り取られた収穫だということを，私たちは次のような人々の責任だとしなければならない。すなわちそれは，恐るべき頑固さで，殺したいほど憎悪している者たちを罠にかけようとする人々である」[71]。

これとは別に，次のような発言もあった。「われわれはすべて，ドイツ民族と総統に忠実であり，自分の祖国への義務を誠実に果たす。そしてそのさい，歴史を操縦する方に向かって手を差し伸べて，主よ，「御心が行われますように」と繰り返し祈ることを忘れない」[72]。

自由な出版というようなものは，すでに長らく存在しなかった。キリスト教の領域においても，帝国著述院[73]ないしはそれに類した部局に所属する編集者，つまりは（ナチスによって）政治的に信頼できると太鼓判を押されていた編集者しか活動できなかったのである。戦争の勃発によって，キリスト教の出版はさらに広範な制約を，物資の不足には限らず，受け入れねばならなかった。『真理の証人』（Der Wahrheitszeuge）誌は，（週刊から）隔週刊に切り替えられ，1941年には発行停止になった ―― キリスト教徒にはわずかな場所とわずかな将来しか認められず，したがってわずかな紙しか認められなかったのである。たとえばカッセル〔のバプテスト出版社〕で作られた日めくりカレンダーなどは ―― 1939年になって初めて以下の版が加えられたわけではないが ―― たとえば総統誕生日への義務的な賛歌を載せるという条件で，ようやく暫定的な続刊の「支払いを受け」ねばならなかった[74]。

「神の御心により彼に一つの定められた任務が委ねられた。彼は私たちの民族を目覚めさせ，一つにした。彼は恥辱と無力から，力と偉大さと名声へと導いた。ドイツ

71) *Wort und Tat*（1940 年から 1974 年まで発行されたバプテスト同盟報）, 1940, S.166.
72) WZ (Der Wahrheitszeuge)（1879 年から 1941 年までの同盟報）, 1939 (8/29), S.294.
73) 〔訳註〕帝国著述院 Reichsschrifttumskammer。ゲッベルスによって設置された帝国文化院 Reichskultur-kammer の七つの部門（著述，映画，音楽，演劇，新聞，ラジオ，造形芸術）のひとつ。言論統制を各分野で行った。
74) Kasseler Illustrierter Abreißkalender 1941（4 月 20 日の「今日の言葉」）

民族の敵どもについても，アドルフ・ヒトラーは，近年の歴史が示すように，或る任務を果たしている。私たちは神に，総統と民族を未来において祝福し守ってくださるように祈ろう。願わくは，彼の仕事が長い平和によって完成されますように。神が総統を，私たちの民族の生存権を確かなものにするための配慮において，助けてくださるように。」

しかしこの「未来」がもたらしたものは，「キリスト教とその共同体形成の審査」[75]，つまり教会の仕事と青少年の仕事における様々な種類の仕事が，妨害されることであった。軍人に対して精神的・牧会的な世話をすることは，組織的に禁じられ，妨げられた。それをなおも行おうとする者は，説教者アルフレート・ハッテンハウアー[76]のように，大きな困難に陥ったのである。全体的に見れば，今なお望むことができたのはただ，「私たちはバプテストでありつづけよう，バプテスマが出来なくなっても，それでもまだ，福音を宣教することができるのだ」[77]（しかしどうやって？）ということだけであった。

説教者たちや男性信徒が軍務に狩りだされたことは，伝道や教会の仕事全般を麻痺させた。さらなる出来事はよく知られている。多くの教会堂が破壊された。1943年には，ハンブルクの神学校やカッセルの出版局も破壊された。死と荒廃と東の地域からの追放があった。いかに多くの叫びと，悲惨と，窮乏があったことだろうか。しかしまた，信仰の勇気と十字架に忠実に従い行く準備ができているということも，それらの悲惨や窮乏の背後に隠れていた。そのことを，あの時代を自分の経験から判断することのできる者はよく知っている。しかしまた，〔後の世代で〕それらを伝聞と，時には恐るべき証拠の歴史研究からのみ知る人々も，感じることであろう[78]。

---

75) Rundschreiben des Bundeshauses an die Vereinigungsleiter, 1942 (Paul Schmidt).

76) 〔訳註〕Alfred Hattenhauer 1894-1972, バプテストの牧師。ヘッセン州 Korbach の教会牧師（1937-1945）などをつとめた。戦後のバプテストの法学者で，自由教会を擁護した Hans Hattenhauer 1930- は，彼の息子である。

77) Hans Luckey の手紙，1941 年 11 月 4 日付。

78) ナチ時代とその結末についてのバプテストたちの個人的証言については，何よりも以下の諸文献を参照。Friedrich Sondheimer: *Erlebnisse mit Gott und Menschen*, Kassel 1958; Siegfried Brauer: Gottes Pläne sind besser, in: *Die Gemeinde*, 1977, Nr. 31-43; Heinrich Wessler: Als das Brot kostbar war. Ein ostpreußisches Schicksal, Wuppertal 1978; Reinhold Kerstan: Ein deutscher Junge weint nicht, Wuppertal 1982 (2. Auflage).

「卑劣な暗殺の魔手から救われたことについて，心の喜びと，神への感謝と，これからも守られるようにとの祈りの約束とともに，心からの祝辞を，福音主義的自由教会連合の名において送ります……。」「1944年7月24日の」この祝辞の電報は，送られない方がよかった，と連署人の一人であったパウル・シュミットは1946年に認めた[79]。なぜ，それにもかかわらず電報が送られたかについて，「納得のいく」説明は確かにない。このテキストには，7月20日事件[80]の実行者たちによって試みられた，独裁者に対する抵抗運動についての神学的な断罪が確かに含まれている。しかし，（犯人への）「憤慨」がこの電報を送った（自由教会の）人々の動機だったのではない。それはむしろ不安だったのである。1933年，34年，36年，40年の電報の後で，今回，1944年には沈黙の中から落ちて来る不安，そして禁じ手をあえて行う動機となった不安があるのだ。そうすることによって人々は，自由教会の小船たちの船団を，あらゆる座礁をまぬがれるべく努力したと考えることができたのである。それゆえ人々はこの電報でもう一度，はっきりと口に出して，アドルフ・ヒトラーに対してヤーを語ったのであり，「国家とその指導に対するイエスの教会の大声のナイン」などでは全くない，小声のナインをすら語らなかったのである。「伝道的な思いが，他の多くの考慮を押しつぶしていた。たとえば，公的な抵抗の言葉によって将来起こるかもしれない利益への考慮とか，そこから生まれてくる諸教会にとっての結果への考慮を押しつぶしていたのである」。そのように，パウル・シュミットは1946年にことの決算を述べている[81]。

1945年の初めになってもまだ，福音主義自由教会連合[82]に対して，オットー・メレ〔メソジスト〕，パウル・シュミット〔バプテスト〕，エルンスト・ピーパー〔メソジスト系の福音教会 Evangelische Gemeinschaft〕，ハインリヒ・ヴィーゼ

79) Amtsblatt des Bundes Evangelisch-Freikirchlicher Gemeinden Nr. 8, 1944. – W. Nitsch (註54), S. 31.

80) 〔訳註〕ドイツ陸軍関係者によるヒトラー暗殺とクーデターの決行。トランクに仕掛けられた時限爆弾はヒトラーの至近で爆発したが，様々な偶然が重なり，ヒトラーは軽傷で済んだ。

81) Paul Schmidt, Unser Weg (註56), S. 8.

82) 〔訳註〕Vereinigung Evangelischer Freikirchen. バプテストやメソジストが中心となって結成していたゆるやかな教会連合。

マン〔自由福音教会同盟 Bund freier evangelischen Gemeinden〕は，「民族と祖国のための祈りの日」を呼びかけていた。

「わが民族が遭遇した未曾有の危機は，最大の自己放棄，喜んで犠牲を捧げること，最も誠実な義務遂行を要求している。すべてのドイツ人は，何が重要であるか承知している。……神の言葉は強大にまた強力に，私たちの状況へと，私たちの憂慮へと，私たちの願いと希望へと語りかけておられる。『苦難の中で私を呼べ，私はお前を救おう，お前は私をあがめるであろう』[83]。……聖書の命令によれば，我々にとって欠くべからざる義務とは，祈ることである。すなわち，支配者たちと政府のために，神が彼らにこの決定的な時に正しい決断をする知恵と力を授けてくださるように祈ること，我々の陸・海・空軍の兵士たちのために，神が彼らをその任務のために力づけてくださるように祈ること，野戦病院にいる負傷した人々のために，敵国において失踪したり捕虜になった人びとのために，爆撃を受けたり疎開させられた人々のために，言語を絶した犠牲を払わされた家族たちのために祈ること，そしてイエス・キリストの諸教会のために，彼らがその神による課題をよりよく認識して，（世の）光と塩となる力を失わないように祈ること，我々の民族全体のために，この厳しい試験に合格し，またそれがこの民族に永遠の救いをもたらすように祈ること，そして，ドイツ民族にかくも偉大な過去を与えてくださった神が，今度もまた苦難に目をとめ，この民族に明るい未来と平和を贈ってくださるようにと祈ることである。その平和は，敵の殺戮意志に沿うものではなく，神の『善き，御心にかなった，完全な』意志に沿うものである」。

カール・ツェーラーは，この呼びかけにコメントしている。「ドイツにおいては，降伏前の数週間，人々はもはや勝利をもたらす奇蹟を求めて祈ることはなかった。むしろ破滅の中の，また破滅の後での保護の奇蹟を求めて祈ったのである」[84]。

83) 〔訳註〕詩編 50 編 15 節。
84) Karl Zehrer, Die Freikirchen und das “Dritte Reich” (註 3), 1978, S. 624f.